調査研究ノート

初期『おかあさんといっしょ』失われた映像を探る

～残された番組資料を手がかりに～

メディア研究部　高橋浩一郎

はじめに

『文研年報2020』掲載の論考「NHK幼児向けテレビ番組の変遷」において，初期の『おかあさんといっしょ』に，作家の飯沢匡や井上ひさし，人形作家の川本喜八郎など外部クリエーターが数多く参加し，質の高いデイリーの幼児向け番組を量産するうえで欠かせない存在となっていたことを指摘した[1)]。しかし当時の映像はほとんど残っていないため，具体的な番組の内容については明らかになっていないことが多い。同番組内で週1回放送された「こんな絵もらった」についても同様である（現在と異なり，1970年代中盤まで『おかあさんといっしょ』の内容は曜日ごとに違っていた）。

「こんな絵もらった」は，1962年4月～1966年3月にかけ毎週木曜日に25分間，全197話が放送された[2)]。俳優の牟田悌三が出演し[3)]，視聴者の子どもたちから送られてきた絵をもとに毎回新作の物語を紹介するという内容である。脚本を作家の筒井敬介，作画をグラフィックデザイナーで絵本作家の堀内誠一が担当した。

NHKアーカイブスには番組台本28冊と写真11点が保管されているが，資料が限られているうえに公開されてないこともあり，これまでほとんど言及されることがなかった[4)]。

今春，堀内誠一の遺族から連絡があり，自宅に原画写真のネガフィルムが残されていることがわかった。あわせて筒井敬介の自宅にも多くの台本が残されていることが判明した。

本稿では，筒井敬介と堀内誠一のテレビ番組制作への関わりをふまえ，今回見つかった資料が幼児番組の歴史の中にどのように位置づけられるかをまず検討する。次に原画写真と台本を照合し，内容が一致する回を特定する。原画と台本を特定できた放送回については具体的な内容・演出を見ていく。さらに番組は放送外への展開を見せるが，その展開を通し他メディアと比較してテレビメディアが持っている特性を指摘し，その可能性と限界について考察する。

1. 筒井敬介と堀内誠一について

筒井敬介は戦後まもない1948年にNHKの契約作家として起用され，幼児向けラジオ番組『お話でてこい』や連続テレビドラマ『バス通り裏』をはじめ数多くの番組の脚本を執筆し[5)]，

『おかあさんといっしょ』には立ち上げ時から関わった。1966年に契約作家の制度が廃止されたあとは，少しずつテレビの仕事から遠ざかるようになり，児童文学や戯曲の執筆に傾注するようになった。

一方の堀内誠一は『ぐるんぱのようちえん』（1965，福音館書店）など数多くの絵本の作画を手がけたほか，アートディレクターとして『anan』や『POPEYE』などの雑誌の編集に関わり幅広く活動した。堀内も筒井同様，「こんな絵もらった」終了以降はテレビの仕事から距離を置いている[6)]。

今回見つかった資料は，外部クリエーターが初期『おかあさんといっしょ』に具体的にどのように関わっていたかを明らかにするうえで貴重なものと言える。

2. 保管されていた資料と内容の特定

今回，堀内誠一の長女・花子氏と筒井敬介の長女・小西理加氏から，返却を前提にそれぞれ原画写真のネガフィルムと台本，その他関連資料を提供していただいた。

ネガフィルムについては一部カビが発生しており，これ以上劣化が進むのを防ぐため，許諾を得たうえでデジタル化して保存することにした。

写真は全部で298点あり，その中にはスタジオの収録写真や視聴者の子どもが描いた絵の写真も含まれていた。いずれも堀内本人による撮影と思われる。原画については，同一カットを撮影し直したものを除くと145点あった。描かれた要素から判断すると3～4話分の原画と推定されたが，キャプションがなく，撮影順も不明なため写真単独では内容を特定できない。

そこで原画写真に対応する台本が残されているか，内容を確認した。台本は全197話のうち164話分あったが，虫食いにより判読困難なものも複数あった。

NHKアーカイブス保管分も含め判読可能な159話分の内容を確認し，原画写真に対応する放送回を探索した結果，すべての原画写真に対応する4話分の内容（62話，78話，96話，170話）を特定することができた。

本稿では，5節で後述する理由によってその中から96話（1964年3月12日放送）を取り上げる。台本の進行にそって，適宜該当する画像を照合しつつ番組の内容を詳しく見ていく。

3. 96話の番組内容の検証

番組オープニングタイトルの映像は台本によると1分10秒のフィルム・アニメーションとされているが，どのような映像だったかは不明である。NHKアーカイブスに残された資料の中に，堀内誠一によるコラージュの原画写真（①）が保管されており，この原画を素材にしてコマ撮りアニメーションが作られたことも推測される。なお，テーマ音楽は服部公一によるものである。

子どもたちから送られてきた絵が飾られたスタジオの映像に切り替わると，「おじさん」役の牟田悌三が現れる（②）。

牟田は，テレビを見ている子どもたちに向けて話しかけるように，スタジオに飾られた絵にコメントしていく。

その中で今日はどの絵を選んでお話をするかを決める。その際，音楽が流れ，牟田は呪文のような以下のセリフを唱える。

お目目をつぶって
くるくるくるっと　くるくるくるっと
三べんまわって　どれにしようかな
パッとお目目をあくと

目の前に傘の絵があるのを見つけた牟田は傘のお話をすることを思い立つ（③）。

ここから物語パートに移る。映像は堀内による作画になり，音声については牟田の語りを交えつつ，物語の登場人物については事前録音された声優たちの演じる声が再生される（④）。

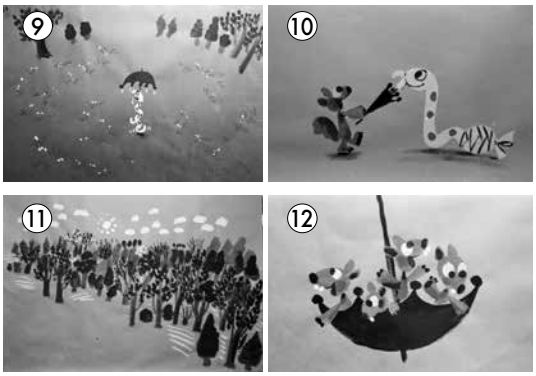
あらすじは，ジャングルに落ちていた1本の傘の使い方をめぐって，さまざまな動物たちが試行錯誤するというもの。

最初に傘を見つけたのはサルである（⑤）。サルたちは一体何に使うものなのかと首をかしげる。その中で動物園帰りのサルは自分には使い方がわかると知ったかぶりをする。しかし，ほかのサルから木の上で暮らす自分たちには無用の長物だと言われる。

結局自分たちには必要ないと，サルはヘビに傘を渡す（⑥）。ヘビは傘をさすが尻尾が濡れてしまう（⑦）。するとカラスから「立ってささないと尻尾が濡れる」と指摘される（⑧）。ヘビは立ち上がって傘をさす。すると確かに濡れないが，無理な体勢をとったため尻尾を痛めてしまう（⑨）。

最後にヘビはリスの母親に傘を渡す（⑩）。リスはどのように傘を使ったのか（⑪）。リスは傘としてではなく，木の枝にぶら下げて子どもたちのゆりかごとして使ったのだった（⑫）。

物語が終わると映像はスタジオに戻り，牟田がお別れのあいさつをする。



以上，「こんな絵もらった」96話の内容を具体的に見た。その結果，番組演出に2つの特徴があることがわかった。

1つは「双方向性」である。番組の冒頭と最後には，視聴者の子どもたちが送ってきた絵がスタジオに飾られた様子が映し出された。そして牟田は画面越しに話しかけながら，その中の1枚の絵をもとに物語を語り出した。これらの演出によって，疑似的な双方向性かもしれないが，番組を見た子どもたちは自分も参加している，少なくとも参加できるという印象を持ったことだろう。

もう1つはテレビが生み出す「マジック」の存在である。牟田が子どもたちの絵をもとにして物語を語り始めるという演出自体が，一種のマジックとして受け止められていた可能性がある。当時の多くの子どもたちは，事前にセリフが録音されていることや，作画が行われているという制作事情などおそらく思いもよらなかったと考えられる。だとすると，牟田はその場で子どもの絵を選んで即興で物語を作り始めているように見えたはずである。呪文のような音楽とセリフは，無作為に絵を選んでいることを演出するためのものであろう。

さらに台本にはおじさんと物語の登場人物の間でかけ合いをするシーンも見られるが，これも事前録音したセリフに対して牟田が決められたセリフを言っているという事情を知らなければ，絵の中の世界のキャラクターと自由に会話しているように見えたであろう。

4. 番組の制作実態

実際に番組がどのように作られていたのか，当時ディレクターとして制作に関わっていた増田淳子（84歳）に取材することができた。増田は1958年入局，のちに夫となる増田元春[7)]と2人で「こんな絵もらった」の制作にほぼ1年間関わった。

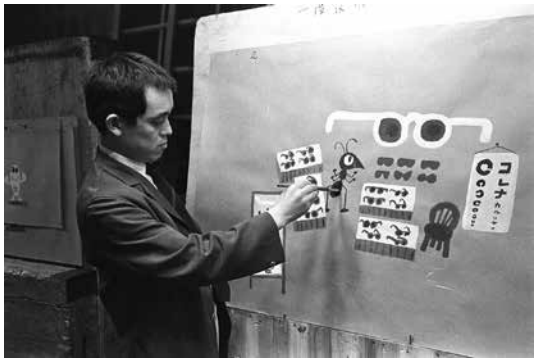
番組がどのように企画されたのか，その経緯はわからないとしたうえで，増田は「提案会議で番組を通していたわけではなく，班長の机の周りに集まって雑談するところから番組が生まれた時代」と答えた。また，作画を担当する画家を探すのに苦労したといい，福音館書店の月刊誌『こどものとも』に作品を発表し始めていた堀内誠一に目をとめ仕事を依頼できたことが，番組が成立した大きな要因だと語った。収録ごとに60枚近くの作画が必要であると増田から告げられ，当初堀内は戸惑ったようだったというが，スタジオ収録にも毎回立ち会い，急な作画の追加に対応したという。

「こんな絵もらった」は4年にわたって200話近く，つまり年間50話程度が制作された。1回分の番組制作がどのように進行していたのか，96話の日程表を以下に記す。

本読み…… 1964年3月5日
録音（セリフ，音楽）……3月5日
収録 ……3月6日

台本の完成がいつかを特定することはできなかったが，年間50本の番組を放送するために翌週にも同様の作業工程が控えていたことから推測すると，いずれにせよ余裕のないスケジュールだったことは間違いない[8)]。

番組ディレクターは2～3人が交代制で担当していた一方で，脚本，作画，音楽の布陣は基本的には固定されていた[9)]。脚本にせよ，作画にせよ，作曲にせよ，4年間，ほかの仕事も抱えながら毎週新作を作り続けることがそれぞれの作家にとって相当な負担だったであろうことは想像に難くない。その中で日々の番組は放送されていたのである。



「こんな絵もらった」スタジオ収録に立ち会う堀内誠一

5. その後の展開

翌1965年，筒井と堀内は『あかいかさがおちていた』[10)]（以下『あかいかさ』）という1冊の絵本を共作している[11)]。絵本の内容を確認してみると，今回原画を特定できた96話にきわめてよく似た物語であることがわかった。内容を特定できた4話のうち96話を取り上げるのはこのためである。両者の作画（一部）を比較した**表**をまとめた。

ジャングルの中に落ちていた傘に対して，サル，ヘビ，リスが自分なりの使い方を試行錯誤するという物語の基本構造は同一である。

しかし，96話ではヘビがリスに傘を渡し，そのまま結部に向かうのに対し（表の7），『あかいかさ』では，ライオンの医者とカンガルーの看護師がクジラの診察をするというエピソードが挿入されている点が異なる（表の8）。

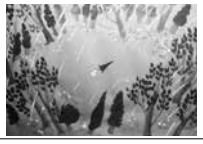
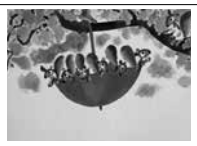
挿入されたエピソードとよく似たモチーフが「こんな絵もらった」97話に確認された。カワウソの医者とトビウオの看護師がクジラを診察するという内容である。絵本化するにあたってなぜこのエピソードが追加されたのかは不明だが，「こんな絵もらった」で生まれたアイデアを複数再利用して作られた絵本が『あかいかさ』であることは間違いないと考えられる。

「こんな絵もらった」96話はどうして『あかいかさ』として絵本化されたのだろうか。番組の二次展開として企画された可能性も考えられるが，出版された詳しい経緯はわからなかった。いずれにしても絵本化された背景には，このあとともに離れることになる筒井と堀内のテレビに対する態度が表れているように思える。それぞれの著作の中にテレビに関する記述が残されているので，それらを参照する。

堀内誠一は絵本の制作に専念するために1974年に家族とともにフランスに移住し，そこで紙芝居を手がけるようになっているが，当時書いた文章の中に紙芝居と比較してテレビに関して次のように記している。

「テレビ・コミュニケーションの効用には人間的な限界がある。個性の発見よりも記号化・通俗化が著しい」「紙芝居の原始的なコミュニケーションの方が子どもには体験的であり，演

表 「こんな絵もらった」96話と絵本『あかいかさがおちていた』比較

	あらすじ	「こんな絵もらった」96話	『あかいかさがおちていた』
1	ジャングルの中に1本の傘が落ちている。		
2	サルが傘を拾う。3匹のうちの1匹は傘の使い方を知っているが，地面の上で使うもので木の上では必要ないと放り出す。		
3	ヘビがサルから傘を譲り受ける。		
4	ヘビは傘が気に入るが，尻尾が濡れてしまう。		
5	カラスから体を全部入れれば濡れないと指摘される。		
6	ヘビは傘に全身を巻きつけて立ったまま跳んで移動するが，尻尾を痛めてしまう。		
7	ヘビはリスに傘を譲る。		
8	ヘビはライオンの医者とカンガルーの看護師に治療してもらう。カンガルーの看護師はヘビから傘を譲り受け，クジラの往診に傘をさしていっしょに出かける。診察をするためにクジラの体の上に乗ったところ，波が荒れたはずみでクジラは潮を吹いてしまい，傘が飛んでいってしまう。		
9	場面転換		
10	リスのお母さんが傘を子どもたちのゆりかごにする。		

© Seiichi Horiuchi

技者も反応によって対処できそこに発見がある」[12)]。

他方の筒井はどうだったのか，テレビを含むマスコミの仕事について自著のあとがきで以下のように記している。

「同じ作家なのだから，主題があちこちで同一になるのは当然と云えば云える」「ぼくはいわゆるマスコミといわれる場所で，多量の仕事をこなしたことがあるので，こうした厚顔無恥な所業をした覚えがずいぶんとある。また，それを受ける側がまるで同じ落語を楽しむように喜んでくれて，制作者も「そうあったほうが無難です」と，押しつけてくるときも多かった。批評家がマンネリだというときは，何も作家だけの責ではないのだと抗弁できる材料はその頃いくらでもあった」[13)]。

「こんな絵もらった」の台本を確認すると，筒井が執筆した物語の中にはきわめてよく似た内容の回が少なくとも2本存在し，それ以外にも似たモチーフを使って別の物語に仕立てている回も見られた。

テレビでは大量のアイデアを生み出す必要がありながら，1つ1つを丁寧に吟味し，推敲する時間は与えられない。放送が済んでしまえば形に残らない。いくら双方向性のある演出をしたところで疑似的なものにならざるをえない。

絵本の読み聞かせや紙芝居であれば，受け手の数は限定される一方，子どもと双方向性のあるコミュニケーションができ，物語が終わったあとも紙媒体として残すことができる。

「こんな絵もらった」を通じて集中的にテレビの仕事をする中で，筒井と堀内はメディアの特性を理解するとともにその限界も見えてくるようになったのではなかろうか。そしてもともと関心が高かった絵本や児童文学などの紙媒体に傾斜するようになり，放送後消えてなくなってしまうはずの物語を絵本の形として残そうとしたのではないだろうか。もしそうだとすれば『あかいかさ』は，筒井と堀内がテレビから生み出し，そこから離脱する転換点を示す作品と言える。

なお，堀内が移住先のパリで残した紙芝居作品の中に『あかいかさ』が含まれていたことが以下の写真からわかる。堀内にとって思い入れのある物語だったと思われる。

2人の作家がこの物語にどのようなメッセージを込めたのかを読み解くことは本稿の範囲から外れるが，未知のものに遭遇したときに知ったかぶりをしたり，人に言われたことを真に受けたりするだけではなく，曇りのない目で受け止め，自分に合ったやり方を自分なりに見つけることの大切さを，子どもたちに向けて伝えていると筆者は受け止めた。

『あかいかさがおちていた』パリでの紙芝居
現地男性が傘をさすヘビの絵を持っている
（撮影：堀内誠一）

6. 番組資料のアーカイブ化の重要性

以上，台本や原画写真などの番組資料をもとに「こんな絵もらった」がどのような番組で，どのように作られ，外部クリエーターたちがど

のように関わったかを見てきた。映像が残されていない番組でも，これまで明らかになっていなかった事実や仮説を資料に基づいて多数導き出せることがわかった。

番組の制作過程で生み出されたさまざまな資料に関して，NHKは体系的な収集・保存を行ってきたわけではない[14)]。そのため，『おかあさんといっしょ』のように外部クリエーターが番組制作に参加している番組を検証する場合は，当事者たちが保管している外部の資料も活用する必要が出てくる。

現在とこれからの番組のあり方を検討するうえで，過去を参照することは重要である。そのためには外部の研究者や遺族と関係を構築し，点在する資料をつなぎ合わせ，新たな価値を見いだしていくことが求められる。

放送当時とは異なり，時間の経過によって，番組自体だけでなく関連資料も，歴史的・文化的な価値を帯び始めていると考えられる。その一方，資料が散逸したり，ことによると廃棄されたりする懸念もあり，なるべく早急にできるところから対応していくことが肝要である。

おわりに

本稿の執筆は，筆者の過去の論考を目にした堀内誠一の遺族から連絡を受けたことがきっかけとなっている。研究の発表もコミュニケーションの一環なのだということを実感した。

テレビは一方向の情報伝達になりがちである。しかし，コミュニケーションとは本来，双方向的な営みである。呼びかけに対して応えること，そしてそのやりとりを積み重ねていくことにコミュニケーションの本質がある。自分の働きかけに対して何の応答もない環境で成長した子どもがどのような大人になるか想像してほしい。一方向の情報伝達というのはコミュニケーションとしていびつである。私たちはそういういびつさに慣らされてはいないだろうか。

「こんな絵もらった」では，番組に絵を送ってくれた子どもたちに作品を返却する際，堀内

「こんな絵もらった」グリーティングカード

誠一によるオリジナルのカードを同封していた。全部で3種あったが，レイアウトの都合上，2種のみ掲載する（P73の写真）。

子どもから受け取ったものを子どもに返す際，当時の制作者はわざわざカラーのオリジナルカードを作って感謝の意を伝えていた。テレビは一方向にしか情報を伝達できないとしても，放送後にきめ細かな対応をすることで，視聴者である子どもに応え，つながることもできる。こうした一見取るに足らないような行為の中に，視聴者とのコミュニケーションを築くうえでの学びが存在するように思える。

なお『おかあさんといっしょ』では，現在も視聴者からの手紙に対して，番組オリジナルのハガキを送っている。

（たかはし こういちろう）

注：

1）高橋浩一郎「NHK幼児向けテレビ番組の変遷－『おかあさんといっしょ』から広がった在宅向け幼児番組群－」『NHK放送文化研究所年報2020第64集』
2）台本の記載によると，うち4話は過去回の再放送だったことがわかった。そのため新作としては193話となる。
3）25回までは俳優の大友純が出演していた。
4）『堀内誠一 絵の世界』（2022，平凡社）で番組について一部触れられている。
5）『筒井敬介童話全集』第12巻（1983，フレーベル館）P200～209，筒井の経歴を参照。
6）テレビ関連の仕事として，堀内は1973年に月刊絵本『ひらけ！ポンキッキ』（フジテレビ総合研究所）創刊号から30号までのアートディレクター・編集長を務めた。
7）増田元春は1959年に入局，2010年まで50年以上にわたり幼児番組の現場に関わり続けた。「こんな絵もらった」の制作は1965年まで担当。
8）台本には録音日とスタジオ収録日が記載されているが，両者の間隔は年度によって1～7日と幅があり，余裕のある回については14日の場合も見られた。
9）なお，台本記載の情報によると，脚本として藤田孝美が少なくとも2回，作画として大村百合子が9回，作曲として湯浅譲二が13回参加していることが確認された。いずれも何らかの事情によりレギュラー作家が関わることができなかった際の代役として登板したものと考えられる。
10）当時『あかいかさがおちていた』はあかね書房から出版されたが長らく絶版となっていた。2011年に童心社から復刻された。
11）筒井と堀内の共作としてはほかに，1970～71年に『ワンダーブック』（世界文化社）に12回にわたって連載された「かわいい とのさま」がある。2013年に小峰書店から単行本化された。
12）堀内誠一「紙芝居パリにいく その2」『母のひろば』1971年6月15日号（童心社）
13）『筒井敬介童話全集』第1巻（1983，フレーベル館）P245～246
14）村上聖一／東山一郎「資料で振り返る番組制作者 吉田直哉」『放送研究と調査』2020年5月号P57